

「死」に構築される存在： Don DeLillo の *Zero K* にみるコミュニティの表象

江藤 知美

Trigonometric Functions and Character Relations
in Don DeLillo's "Sine Cosine Tangent" and *Zero K*

Tomomi ETO

【キーワード】 ドン・デリーロ、現代アメリカ文学、死、コミュニティ、人体冷凍保存、家族

2016年に発表された *Zero K* (2016年) は、死を克服しようとするテクノロジーの夢と、それに伴う人間的関係の喪失を描いた作品である。作中に登場する冷凍保存施設〈The Convergence〉は、死を超越することによって新たな共同体を形成しようとするが、その共同性は生命や時間、さらには言語さえも停止させるものであり、結果的に「生の共有」を失った共同体として提示される。本作における「コミュニティ」は、もはや他者との共存を意味するものではない。

一方で、作品の中心に位置するジェフ (Jeff) とアーティス (Artis) の関係は、こうした技術的共同体とは異なる、もう一つの共同性の形を示唆する。アーティスが冷凍され、他者とのあらゆる接続を断たれた後も、ジェフは彼女の存在を思考し続ける。その姿勢は、「理解不能な他者」との関係を通して成立する微小な共同性の試みとして読むことができる。つまり、デリーロは〈The Convergence〉という人工的共同体の終焉を描くと同時に、死と喪失を受け入れることでしか成り立たない「脆い共同体」の可能性を提示しているのである。本論は、この対比を通じて『*Zero K*』におけるコミュニティの再構想を明らかにすることを目的とする。

1. サインとコサイン、そして

冒頭に登場するのは父親と息子という親子関係である。物語が親族間の会話から始まるのは、デリーロ作品においてさほど珍しいものではない。書き出しの “Everybody wants to own the end of the world” (3) は過去に父親が主人公に放った言葉で、主人公はその言葉を思い出しつつ彼らに会いに向かっている場面で始まる。二人の会話は病に侵されている母アーティスの今後についてだが、少し彼らの関係を整理してみたい。ジェフとアーティスには血縁関係はなく、血縁上の母親マデリン (Madeline) は、すでに亡くなっている。彼が13歳の時にロスを出て、離婚していることが描写されており、物語中にはジェフの回想を交えながらも、時折ロスから新しいマデリンとの過

去の情報が追加されている。ロスから語られるマデリンとの過去の出来事を受けて、ジェフは以下のように考えていた。

I wanted to believe that he'd reached another tier of reminiscence, deeper and not so bleak and suggesting element of regret and loss, and maybe a share of the blame. (*Zero K* 101 underline mine)

「後悔と喪失、もしくは責任の一端」を考えたとき、ロスが人体冷凍される第7章の場面において、次のようにジェフは思いを巡らせている。

I decided not to be troubled by this. He had walked out the door, rejecting his wife and son while the kid was doing his homework. Sine cosine tangent. These were the mystical words I would associate with the episode from that point on. The moment freed me of any responsibility concerning his particular numbers, date of birth included. (*Zero K* 234 underline mine)

ここからロスの人体冷凍によって呼び起されるのは、幼少期のロスの家出の記憶であり、それは追体験という形になってしまっている。この記憶の一端には三角関数の「サイン、コサイン、タンジェント」という言葉が同時に浮かび上がっているようである。この「サイン、コサイン、タンジェント」が登場するのは第3章のロスが家を出たときの回想、そして第5章の他の家庭を垣間見たときの記憶についての回想の場面である。つまり単純な単語のように挿入されている「サイン、コサイン、タンジェント」もジェフにとっては「家族」という概念を呼び起こす装置として機能していることがわかる。この三角関数の概念と彼らの関係性を結び付けて考えたとき、それぞれの人間性と彼らの関係性は次のようになる。

生命工学を自分が成した財力によって極限まで利用しようとするロスは、三角関数にたとえるならばコサインに相当する存在であろう。ロスの価値観と行動を整理すると次のようなる。

"Faith-based technology. That's what it is. Another god. Not so different, it turns out, from some of the earlier ones. Except that it's real, it's true, it delivers." (*Zero K* 9)

He was a man shaped by money. He'd made an early reputation by analyzing the profit impact of natural disasters. He liked to talk to me about money. [...]

One evening there was my father on TV, an obscure channel, poor reception, Ross in Geneva, sort of double-imaged, speaking French. Did I know that my father spoke French? Was I sure that this man was my father? He made a reference, in subtitles, to the ecology of unemployment. (*Zero K* 14)

三角関数におけるコサインは、直角三角形の斜辺と底辺の比によって定義され、基準となる鋭角($0<\theta<90^\circ$)の値によって一意に定まる。言い換えるとこの鋭角は三角関数上のコサインとともに

あり、当然のことであるがこの鋭角が定まることによって他のサイン、タンジェントも定まってくる。単位円による定義においても、 χ 軸は $\cos\theta$ で基準線であり、サインとは常に 90° ずれた関係と定義される。このようなコサインの性質は、自己の基準を絶対視し、その基準に他者を従わせようとするロスと重なり合う。また、マデリンはもちろんのことジェフとの会話から読み取るに、相いれない互いの感情がぶつかり合っている。

“You had access denied to others.”

“But I wasn’t there to acquire. I was there to stand and look, or squat and look. To read the titles on the spines of priceless books in the caged stacks. Artis and I. You and I, once, in New York.”

[…]

“But what’s more serious than money?” I said. “What’s the term? Exposure. What’s your exposure in this project?”

I spoke without an edge. I said these things quietly, without irony. (*Zero K* 31)

“You didn’t want the job. Turned it down.”

“It wasn’t right. I’m talking to an important person in an investment strategy group. It’s a definite possibility.”

“People out of work. You were offered a job in a strong company.”

“Set of companies. But I was not dismissive. I considered every aspect.”

“Nobody cares that you’re my son. There are sons and daughters everywhere, in solid positions, doing productive work.”

“Okay.”

“You make too much of it. Father and son. You would have become your own man in a matter of days.”

“Okay.”

“People out of work,” he said again, reasonably. (*Zero K* 201)

このロスに左右される存在であるジェフは言わずもがな「サイン」といえるだろう。ロスという基準軸に従属しつつも周期的に振幅を変えながら、揺れている。特に、サインとコサインを関数のグラフを考えたときこの二つの曲線はつかず離れずを繰り返し、振動しあっているように波形を変化させている。上記引用にもジェフはロスの根幹であろうと思っていた資金について、ちくちくと詰める場面もあれば、ロスがジェフの仕事を見繕ったにも関わらず断ったことにこんこんと詰められる場面は、相反する力関係が読み取れる。

すると必然的にマデリンはタンジェントということになってくるわけであるが、単位円の関数で考えてもサイン、コサインのそれぞれに影響され位置を定められるタンジェントはマデリンそのも

のである。さらに言えば、タンジェントはサイン、コサインそれぞれの軸に引っ張られる存在ではありつつも決して重なることはない。また、タンジェントの関数グラフを考えたとき、コサイン、サインとは全く異なった波形を描くことは、決して到達しえない距離としての「死」を象徴していると解釈できる。ジェフとロスの関係性における接触が不可能であることや、決して完全には交わらない。このような三角関数の特性は彼らの家族の限界、非同期性の象徴といえるだろう。加えて *Zero K* を発表する前に雑誌 *New Yorker* で発表していた短編が *Sine Cosine Tangent* という三角関数をタイトルにしていることを鑑みると、この親子関係も3人でなくてはいけない必要性が自ずと前景に出てくる。

しかし短編では上記の3人しか描かれていなかったが、*Zero K* ではまた違った三角関係を描いているのではないだろうか。物語は別の三角関数も占めていることを踏まえてアーティスについて考察してみる。

2. 複数のタンジェント

アーティスは人体冷凍の施設に移動してから言語の崩れが見られ、そして冷凍処理をされたのちのモノローグの章には、言語同様断片化された意識の描写が続く。冷凍保存の過程のためにアーティスの身体と意識は、物理的・時間的にロスやジェフから隔絶されたものとなっていく。そして生と死の境界も曖昧にし、その象徴として“heralds (先駆者)”として昇華される。また彼女の存在は、超越的、非同期的な共同体として定められる。The Convergence 内でジェフが遭遇した Ben-Ezra と自称する男がいうことにはこの施設は“Untapped reserves of rare minerals and the rolling thunder of oil money and repressive states and human rights violations and bribable officials. Minimal contact. Detachment. Disinfestation.” (*Zero K* 129) ということを加味すれば、ここに固定されるアーティスの存在もまた他との接触のない非同期性を帯びてくるのである。加えて、注目すべき点は、その彼女の存在がロスやジェフからの接触できない距離に発散されるものにも関わらず、その存在のためにロスやジェフの定点さえ規定してしまうところである。アーティスの生命の終わりを引き延ばすためのロスの計画は、ロスが動かしてきたはずであるのに、アーティスの行方がどこにありどこへ向かうのか、空間的、時間的な追跡が要求される。以上のように考察するとアーティスはロス、ジェフ、アーティスにおける三角関数のタンジェントを担っているといえる。

先の章に述べたマデリンの描いたタンジェント軸を踏まえると、やはり「死」というのが一つの共通点である。ジェフの記憶されているマデリンは母親としての記憶が大部分であるが、ロスの臨終を看取る前に呼び起されたマデリンの今際の際の記憶もまた“My mother was ordinary in her own way, free-souled, my place of safe return.” (*Zero K* 249) と母であると同時に、自分の定点を規定してくれた存在であると断言している。同じようにロスにとってアーティスも記憶を呼び起こす人である。マラソンをしたことや、猫を飼っていたことを語るロスが、アーティスの死を眼前に、下記の引用の通りジェフに語られている。

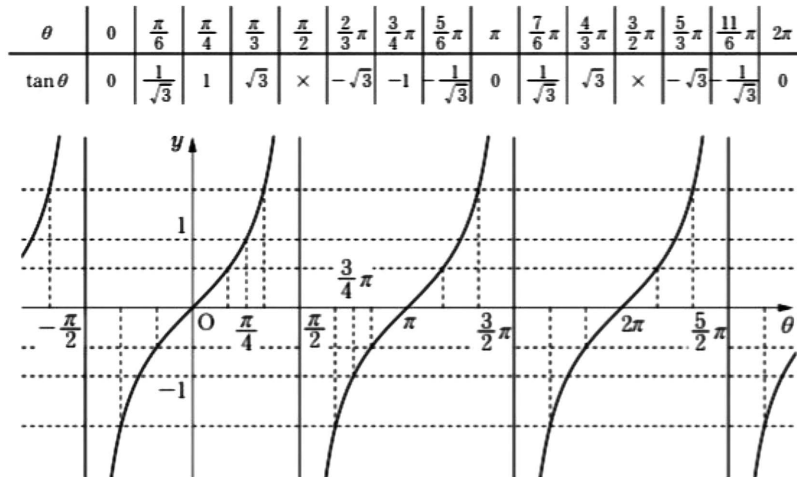
He is already locked in retrospection, seeing Artis, I thought, in drifting images, something he can't control, flaring memories, apparitions, all set in motion by the fact of his decision.

He will not be going with her.

It was pounding his down, everything, the stone weight of a lifetime, everything he'd ever said and done brought to this moment. (*Zero K* 137)

ジェフのようにロスもまた自分の定点を規定してくれた存在がアーティスであることは明白であり、彼女の今際の際の記憶を自分に刻み付けている。ここで注意しておきたいのは、マデリンとアーティスが同様のタンジェントではないということである。再び三角関数のグラフを思い出してほしい。 $y = \sin\theta$ と $y = \cos\theta$ のグラフは正弦曲線であるのに対して、 $y = \tan\theta$ のグラフは下記の図の通りになる。

【 $y = \tan\theta$ のグラフ】



θ が負であるといくつかの曲線が浮かび上がってくるのが、タンジェントの特徴であり、それぞれの曲線が一定の直線に限りなく近づくが決して交わらないことを考えると、それぞれの直線である漸近線で区切られた曲線たちがマデリンとアーティスを表現しているように見える。

3. 失われたタンジェント

忘れてならないのは、*Zero K* にはもう一つの三人模様が描かれていることである。ジェフと恋人のエマ、そして彼女の養子であるスタックである。エマと彼女の元夫が見つつけてきたスタックはニューヨークに連れてこられてからオンライン上の賭け事に興じていたり、パシユトー語を話していたりとエマの心配を横目に彼女の知らない世界を堪能していた。ジェフと岩の定義に挑戦した後に、スタックはエマのもとを去る。スタックはエマの普通の生活に安住するわけでもなく、ジェフの世界観を受け継ぐこともない。自分の方向へ自由に駆け出す様子はタンジェントそのものである。

る。そして皮肉なことにスタック不在による存在感の助長は、タンジェントの特徴をさらに強調するものだといえるだろう。だが、この三人の関係が空中分解してしまうのもスタック失踪が原因で、元夫とスタック捜索に従事しなくてはいけなくなったと電話があってから、彼らの関係に「元夫」という人物が入り込んでしまったのも一つの要因であり、それは同時に彼らの三角関数が成り立たなくなってしまうことを意味する。タンジェントを失ったジェフとエマを定位するものではなく、ジェフは街中で見かける人物に話しかけたり、バスで出会った子どもの存在に改めて気づくようになったところで物語が終わる。ジェフを共通とした三角関数モデルを並置することで *Zero K* における数学的比喩としての三角関数は、登場人物の関係性を可視化し、デリーロが描いてきた家族、共同体、身体、死の立体構造を読み解く手がかりとなることが分かった。また、三角関数の特性が、身体の非同期性や脱身体性の象徴と解釈できることも可能であろう。以上の通り、三角関数モデルは、文学分析における実践的な比喩装置として有効であることが示された。

参考文献

- Boxall, Peter. *Don DeLillo: The Possibility of Fiction*. London: Routledge, 2006.
- Cowart, David. *Don DeLillo: The Physics of Language*. Athens, GA: U of Georgia P, 2002.
- . “The Lady Vanishes: Don DeLillo’s Point Omega.” *Contemporary Literature*, vol.53, no.1 (31-50), 2012.
- . “Don DeLillo’s Zero K and the Dream of Cryonic Election.” *Don DeLillo: Contemporary Critical Perspectives*, ed. K. da Cunha Lewin & K. Ward. Bloomsbury, pp.143-157. 2019.
- DeLillo, Don. *The Body Artist*. New York: Scribner, 2001.
- . “Sine Cosine Tangent.” *New Yorker* 22 Feb. 2016. An edited excerpt from Zero K. <https://web.archive.org/web/20160503030612/http://www.newyorker.com/magazine/2016/02/22/sine-cosine-tangent> (2025 年 12 月 1 日閲覧)
- . *Zero K*. New York: Scribner, 2016
- DePietro, Thomas, ed. *Conversations with Don DeLillo*. Jackson: UP of Mississippi 2005.
- Dewey, Joseph. *Beyond Grief and Nothing: A Reading of Don DeLillo*. Columbia: UP of South Carolina, 2006.
- Lewin, Katherine Da Cunha, and Kiron Ward. *Don DeLillo: Contemporary Critical Perspectives*. Bloomsbury Publishing, 2019.
- Osteen, Mark. *American Magic and Dread: Don DeLillo’s Dialogue with Culture*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2000.
- Tempest, Kae. “Conversation with Kae Tempest at the PanMacmillan.” Pan Macmillan. <https://www.panmacmillan.com/blogs/literary/don-delillo-and-kate-tempest-in-conversation> (2025 年 12 月 1 日 閲覧)
- 日吉信貴『ゼロ K』東京：水声社、2023 年。
- 渡邊克昭『楽園に死す アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』大阪：大阪大学出版会、2016 年。

Abstract

Don DeLillo's *Zero K* (2016) explores the tension between technological transcendence and the loss of human relationality in the contemporary world. The cryonic facility known as "The Convergence" represents an attempt to construct a new kind of community by overcoming death through technology. Yet this community, founded on the suspension of life, time, and even language, ultimately reveals the impossibility of genuine human connection. In contrast, the relationship between Jeff and Artis suggests a different, fragile form of communion that persists despite separation and death. Artis's cryonic preservation severs all relational bonds, while Jeff's ongoing contemplation of her absence embodies an ethical engagement with an unknowable other. Through this juxtaposition, *Zero K* questions whether community can exist beyond biological life and technological mediation. This paper argues that DeLillo redefines community not as a collective transcendence of death, but as a shared recognition of mortality and loss—a paradoxical "community of finitude" that resists technological totality.

By juxtaposing trigonometric models centered on Jeff, *Zero K* demonstrates how mathematical metaphors can illuminate character relationships and provide insight into DeLillo's multidimensional explorations of family, community, the body, and death. The properties of trigonometric functions further symbolize bodily asynchrony and disembodiment, showing that such models can serve as effective tools for literary analysis.